

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6 月 10 日現在

機関番号：12401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820070

研究課題名（和文） 補色調和の美学と倫理：西欧モダニストの「均衡」言説と生活様式

研究課題名（英文） Aesthetics and Ethics of Complementary Harmony: Discourse of "Equilibrium" in European Modernism

研究代表者：加藤 有希子 (KATO YUKIKO)

埼玉大学・教育機構教育企画室・准教授

研究者番号：20609151

研究成果の概要（和文）：本研究「補色調和の美学と倫理：西欧モダニストの「均衡」言説と生活様式」は19世紀後半から20世紀前半にかけて隆盛した西欧モダニズム画家が称揚した補色調和の美学を分析し、その美学が彼らの生活倫理、すなわち医療や衛生などの日常習慣をどのように規定していたかを明らかにしてきた。

研究成果の概要（英文）：This study "Aesthetics and Ethics of Complementary Harmony: Discourse of "Equilibrium" in European Modernism" has analyzed the aesthetics of complementary harmony in European Modernism from the latter half of 19th century to the mid-20th century. This research has clarified how the aesthetics of certain modernist painters, such as Neo-Impressionists and Henri Matisse, influenced their own medical practices and hygiene.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学美術史

キーワード：補色調和、均衡、西欧モダニズム、衛生

1. 研究開始当初の背景

申請者は2010年12月に博士論文『*Color, Hygiene, and Body Politics: French Neo-Impressionist Vision and Volition, 1870-1905*』（色彩、衛生、身体政治：フランス新印象派の視覚と意志、1870-1905）をアメリカのデューク大学美術史表象文化学科に提出し、博士号(Ph.D.)を取得した。この論文は、従来色彩論や政治史的観点からの分析が主流だった新印象派研究に対し、医

療史や衛生史の立場から、G・スーラ、P・シニャック、C・ピサロらの点描を解析した。より具体的には、新印象派画家が傾倒したカラーセラピーやホメオパシーなどの医療処置法が、彼らの「均衡」倫理に基づく補色調和美学と密接に関係していたことを論証し、新印象派の美学と生活倫理の結節点を明らかにした。

美学美術史研究において医療や生活倫理に目を向けることは、政治史やジェンダー

研究などの既に使い古された手法を乗り越える意味でも、極めて重要である。欧米の美術史・表象文化領域では、ティモシー・レノワール、バーバラ・スタフォード、ロイ・ポーター、アラン・コルバンらが、医療と視覚表象の研究を進めつつあったが、同分野の研究はまだ始まったばかりであった。

近代色彩学の権威であるジョルジュ・ロック(1997)も主張するように、19世紀後半から20世紀前半にかけての西欧絵画史は「補色の世紀」であった。新印象派に留まらず、ヴァン=ゴッホ、キルヒナー、カンディンスキー、イッテンらの表現主義、ヴラマンクらのフォーヴ、ドローネー、グレーズらのキュビスト=抽象画家らが、こぞって補色対比を彼らの絵画制作の中心原理に据えた。彼らの補色の美学と科学は、ジョルジュ・ロック(1997)、マックス・イムダール(1967)、ジョン・ゲージ(1993, 1999, 2006)、デイヴィッド・バッチェラー(2008)、村田純一(2002)、前田富士男(2002)らの各国の色彩美学者によって明らかにされてきたが、これらの補色の美学が画家の生活習慣に与えた影響は、ほとんど研究されてこなかった。しかしヴァン=ゴッホのカラーセラピーへの傾倒、カンディンスキーの色彩玩具の制作、グレーズやイッテンの色彩曼荼羅への関心など、モダニストの色彩美学は、多分に「生活」の局面へも浸透している。本研究は、モダニズムの補色研究を通じ、色彩の美学(エステティックス)と倫理(エティクス)の接点を明らかにすることを目指した。それは疎外や終焉がしばしば指摘される近現代芸術に「生活」の次元を取り戻すヒントにもなると考えたからである。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀後半から20世紀前半にかけて隆盛した西欧モダニズム画家(新印象派やフォーヴら)が称揚した補色調和の美学を分析し、その美学が彼らの生活倫理、すなわち医療や衛生などの日常習慣をどのように規定していたかを明らかにした。「補色が調和的である」という言説は、三視神経を均等に使うことを快と考えたヘルムホルツら神経心理学者の見解を起源としている。しかしこの「均衡 equilibrium」の要請は美学の領域に留まらず、医療、衛生などの生活倫理を貫いていた。本研究は、モダニズム芸術をケーススタディとし、美学と生活倫理との協働を詳らかにすることで、アートワールドの議論に偏りがちな日本の美学美術史研究に一石を投じた。

3. 研究の方法

下記3分野についての資料を国内外で丹念に収集し、理論的に分析を行った。

①補色調和を標榜したモダニズム画家の生活習慣が分かる伝記、書簡、手記等。

②補色調和を標榜したモダニズム画家が参照した色彩論

③1900年前後の欧州における生活世界改善運動に関する一次資料、著作、論文

初動調査として、2011年度の所属大学である立命館大学と、2012年度以降の所属大学である埼玉大学の図書館を通じて、できるだけ多くの参考資料を取り寄せ、購入した。日本国内のILLサービスを有効活用したため、海外での仕事を軽減した。

また研究代表者は2004年から2010年までアメリカ合衆国のデューク大学の博士課程に所属し、アメリカ国内の図書館やアーカイブの調査を積極的に行っていたため、とりわけ新印象派に関する貴重資料はそのコピーを所持していた。またその際にできたアーカイブリストとの連絡で、貴重資料のコピーを取り寄せし、実際の渡米をする手間と資金を省いた。

しかし2012年9月に、それでも不足している資料を収集するため、フランス国立図書館とロンドンのウェルカム科学史図書館で調査を行った。その際は、アメリカ滞在の際に集められなかった色彩療法の資料を中心に、閲覧、収集した。

4. 研究成果

本研究は、美的観賞における「無関心性」やモダニズム芸術における「純粹芸術」の称揚ゆえに等閑視されてきた芸術活動と生活倫理(アートワールドから外れた卑近な関心)との協働を改めて掘り起こし、一時代の芸術活動のアクチュアルな様相を、新印象派を中心とするモダニズム芸術をケーススタディとして、解き明かした。今日、医療や衛生といった日常の生活倫理の問題は、政治、経済、民族、宗教、ジェンダーなどの格差を超えるグローバルな関心である。

本研究は、「均衡」概念に着目することにより、近現代社会を貫くグローバルな価値観の一端を明らかにした。「均衡 equilibrium/équilibre/Gleichgewicht」は17世紀に物理学や心理学で登場した比較的新しい概念である。語尾の librium/libre/gewicht が秤や重量を意味していることからわかるように、力や重さの量化と密接な関わりを持っている。「バランス

のとれた性格」、「権力や経済関係の均衡」、「自然と人間の力の調和（エコロジー的倫理）」など日常套句となった倫理的要請は、この近代的な定量世界を貫く「均衡」概念から波及している部分も大きい。本研究を進めることは、補色調和の研究に留まらず、「均衡」言説を基底に置く近現代の生命倫理やエコロジー倫理など幅広い領域と問題を共有する。特に美学美術史分野で近年盛んなエコロジー美学の研究に対しても、本研究は一定の貢献ができた。

出版物としての主たる成果は、新印象派の色彩論と彼らの衛生療法との相関関係を、「均衡」の概念の考察から明らかにしたことである。その成果は単著『新印象派のプラグマティズム』（三元社2012）で公に発信した。

その後、ジョン・ラスキンなどの研究を通じて、同時代のモダニズム画家たちにおける色彩と衛生療法との相関関係を検証したが、新印象派ほど体系立てて論証はできなかった。その代替として、新印象派の画家たちが19世紀末に関心をもっていた色彩療法（美学と衛生の結節点）がその後どのように発展したかを研究することにより、感性学と衛生学との協働を明らかにしようと努めた。この研究は、来年度から内定が決まっている「若手B」の色彩療法を主題化した研究に引きつがれる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

1. Yukiko KATO, “Synopsis/Introduction: “Multi-Sensory Aesthetics and the Cultural Life of the Senses,” or a Mission of Ars Vivendi,” *Ars Vivendi Journal*, no. 3, Ritsumeikan University, February 2013, pp. 1-3.
※査読あり

2. Yukiko KATO, “The Life of Color - Color as Cross-Media - John Ruskin and Afterwards,” *Ars Vivendi Journal*, no. 3, Ritsumeikan University, February 2013, pp. 69-82.
※査読あり

3. 加藤有希子「芸術は生存に関われるか：エネルギー論からみるアート」『生存学 vol. 5』、生活書院、2012年3月、119-133頁
※査読あり

4. Yukiko KATO, “Cubism in Color: An Untold History,” *Aesthetics* (『国際版美学』) vol. 15, 2011年5月7日、pp. 76-89.
※査読あり

〔学会発表〕（計3件）

1. 加藤有希子「美と健康の接近——フランス新印象派と〈民間療法〉」、埼玉大学教養学部31番教室、2012年5月11日〔※招待講演〕

2. 加藤有希子「美と健康の接近——フランス新印象派と〈民間療法〉」、第62回美学会全国大会、於東北大学、2011年10月17日。

3. Yukiko KATO, “Color as Cross-Media: John Ruskin and Afterwards,” International Symposium: Multisensory Aesthetics, Keio University, Tokyo, Japan, July 30, 2011.

〔図書〕（計2件）

1. 加藤有希子「キュビズムと色彩——もうひとつの物語」、前田富士男監修『色彩からみる近代美術』所収、三元社、2013.

2. 加藤有希子『新印象派のプラグマティズム：労働、衛生、医療』、三元社、2012.

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 有希子 (KATO YUKIKO)

埼玉大学・教育機構教育企画室・准教授

研究者番号：20609151

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：